

リーダーシップ研修 実施報告書

【日時】令和4年7月15日（金）16:00~17:30

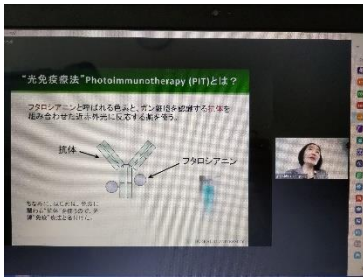
【場所】岐阜薬科大学第一講義室およびオンライン

【講師】小川美香子 氏（北海道大学大学院薬学研究院医療薬学部門 医療薬学分野生体分析化学研究室 教授）

【演題】病気をを見つける薬から治す薬へ

【参加者数】97人（岐阜薬科大学教職員19人、学生73人、岐阜大学2人、岐阜女子大学1人、その他2人）

このセミナーは、岐阜薬科大学アントレプレナーシップ講演会（Tongali プロジェクト）の一環としても開講された。岐阜薬科大学の教職員や学生、関係機関の構成員が多数受講した。講師らが研究開発した薬がベンチャー企業から製品化されており（アキラルックス® 点滴静注 250mg）、この薬の研究に関することからキャリアのことまで軽妙な語り口でお話いただいた。



演題にあるように、最初は「がんを見つける薬」につなげるため実験を繰り返してきたが、ある時仮説に反した結果が出てがん細胞が死んでしまい落ち込みかけた。しかし「病気を治す薬」にならないかと発想を転換し、がん細胞に特異的に働く「光免疫療法」の開発につながった。自分が研究開発に関わった薬が臨床で使われるということは薬学部出身者として非常に嬉しいことで、現在も学生には研究の全作業をなるべく自分が行うようにと指導している。

光免疫療法の薬の実用化を目指して大手企業に声をかけたが相手にしてもらえずアメリカのベンチャー企業にまかせることにしたのが、ベンチャー企業との付き合いの始まりであった。この企業は、現トップが工学部出身でサイエンスを理解できる人であり、研究者と直接話ができることは大きなメリットであると言える。ベンチャー企業と協同で研究開発することのメリットと留意点について講師の考えを聞いた。ビジネスの世界を知ることや企業との共同研究は資金面は大きなプラスだが、学術面や実用面などバランスをよく考える必要があると言われる。ベンチャーなら自分が作ったものが世に出せるが、慎重に行わなければならないところもある。

また、自身のキャリアを振り返りながらその時々思ったこと、現在思うことや願うこととお話いただいた。講師は北大ダイバーシティ・インクルージョン推進本部協力教員でもあり、昔もいまも「無意識の偏見」があるので気をつけたいということ、今は「ダイバーシティ」に加えて「Equity」精神も大事であることを述べられた。そして、誰でも仕事も家庭も楽しめる時代にしたいこと、まずはとにかく女性上位職を増やして男性の意見のみで組織運営されている現状を変えたいことも話された。



今回の講演会では、自身のキャリアと新薬開発を合わせてとても分か

りやすくお話しいただき、研究室主宰者として、またベンチャー企業と深く関わりを持つ立場（2020年 Rakuten Medical Scientific Advisory Board 就任）として、アカデミアとビジネスの両方の視点からの話を聞くことができた。学生だけでなく若手研究者などもロールモデルとして貴重な体験を聞くことができ、また企業についてもアカデミアの立場からの発言を聞くことができ、非常に有意義な講演会となった。